

釣れ釣れなるままに

2012年思い出の釣行記 PART. 8

ザイルとハーケン

仲俣釣狂

登山用具

札幌交綸会の南氏（ブログ「ボナさんの北海道釣り三昧」の主宰者）から電話をいただいた。11月18日の釣遊会と交綸会との合同大会で私がどこに下りるのかというものだ。交綸会の当番幹事になっているらしく、最後の会員を案内する役を担っているため、最終地点である森港に一番近い桂川で下りる私が最後だと見越してのものだった。

今回が平成24年度最後の大会となる。今年度の私の成績は、第1回大会の藻岩岬での優勝以来ぱっとしたものはない。年間優勝には絡めなかったが何とか記憶に残る釣りをしたいものだ。昨年のこの大会では最初に入った桂川で釣果がなく、移動先の湯ノ崎で短時間に小物ばかりだったが何とか規定の10本をそろえることが出来たのだ。それで、今回は最初から湯ノ崎に入る予定にしている。潮は着いた時が最干潮時で朝方に満潮を迎えるいわゆる逆潮になっている。昨年、湯ノ崎に着いたときは丁度朝方の満潮時で防潮堤の下まで波が打ちつけている状態で、防潮堤の上から遠投をかけたのだが、今回は防潮堤前のゴロタ浜に下りることが出来るのだ。それで、防潮堤が崩れた崖を下りることが出来るようにと、ザイルとハーケン、クライミングハンマー、アイゼンを用意した。名前は登山用具で勇ましいが、自宅にあるロープと鉄杭、金槌、磯スパイクである。ちなみにカラビナはロープでつくった瘤、ピッケルはスキーストックというところか。わずか5mほどの崖下りなのだが、道具が無いと海岸縁まで下りていけそうにもないのだ。



自前のザイル？ハーケン？クライミングハンマー？アイゼン？

グーグルマップ

コマセは前回使い切れずに残してしまったものにイカゴロの残りを絞り出し、アミブロック3個、ソイ・アブラコ・カジカ1袋を加え、さらにビックパワーの粉物を注ぎ足して硬さを調整した。今回は最後の大会なので残さないように使い切りたい。また、エサにはゴロ60本、塩ニンニクカツオ6本、苫小牧港でのアナゴ釣りの残に塩をしておいたイソメ、ホタテのミミ、マス半身を用意した。噴火湾の釣りにはホタテのミミがいいと聞いていたのでスーパーで探したが、綺麗に処理された刺身用冷凍ホタテは置いてあるのだが、ウロの付いた生が見当たらなかった。それで何店か回ってようやく小さな鮮魚店で見つけたのだ。そのホタテの横に羅臼産の本マスが並べられてあった。身が真っ赤で夜が明けてからのアブラコに効き目がありそうに思えて買ってしまった。さらにその横には、稚内産の黒ゾイが並べられてあった。50cmほどの腹がでっぴりと太っていて、美味そうというよりはこんな魚を釣ってみたいという衝動に駆られた。

最近グーグルマップの航空写真が鮮明になってきた。今回の鷲の木周辺を検索すると海岸沿いの根や溝がくっきりと写し出されて大変参考になる。今までは、高額な空撮ガイド本を買い足して調べてきたが、時代の変遷とともに新しい道路やトンネル、護岸が出来て海岸の様子も変化して用を足さなくなってきた。これからはこのグーグルマップで事足りてしまう。湯ノ崎をよく見ると海藻がビッシリと付いた根原が広がっていて、私が昨年打っていた所は大きな溝になっている。他の有名釣り場も参考になるかと印刷して皆さんに見てもらおうと是非欲しいというのでバスの中で渡した。しかし、私が持って行ったものは普通の西洋紙に印刷したものだだったので、写真用紙に印刷してもっと鮮明なものが欲しいと言われてしまった。

ロッククライミング

高速を使って、午後10時半には始点の山越駅に着いた。同海岸で大会を開いている海鱗会、名人会より早く着いたのだ。皆さん喜び勇んで順次降りていく。私は最後に堀内氏、南氏と一緒に桂川の入口にあたる三叉路で降りた。堀内氏や南氏は桂川河口から鷺ノ木漁港方向へと進み、私は反対方向の踏み分け道を進んで湯ノ崎へと向かった。キャスターに荷物を積んでいるのだが、昨年より更に荒れ道になっており、なかなかの困難を極めた。ようやく目印になるコンクリートの構造物に辿り着き、ここから2段になる崖を下るのだ。

最初の崖は思ったほどではなかった。2段目の崖は高さが5m程なのだがやはりロープを使わなくてはならない急勾配だ。崖上にはイタドリしかなかった今年の記憶だったが、幸いにも小さな灌木があり、それにロープの端を結わえた。ハーケンやハンマーのお世話にならなくて済んだのだ。私が打ち付ける鉄杭よりこの灌木の方がはるかに丈夫だろう。ロープは手が滑ってしまわないようにとサージェンスノット(チチ輪)で瘤を作っておく。ザイルの結び方に登山用語でフィッシャーマンノットというのがある。私は単に「電車結び」と使っているが、フィッシャーマンとは、いかに釣り用語が広く使われているのかわかる。

フィッシングブーツにフィッシングスパイクを付けて、サージェンスノットでつくったロープの瘤に手を掛けながらまずは竿袋を担いで下りてみた。なかなか具合がいい。今度はリュックを担いで慎重に下りていった。しかし、途中で足元がズルッと滑って転倒し、リュックの重さに負けてそのまま下までズルズルと滑り落ちて胴長が泥だらけになってしまった。いつも汚さないようにと注意して、釣りから帰ると真水で丁寧に洗って陰干しし、大事にしてきたものなのに……。

ともかく無事に下りることが出来た。今度は防潮堤の胸壁が崩れてドーム状になったトンネルの下を潜らなければならないのだが、残った天井が崩れてきたらひとたまりもない。衝撃を与えないように静かにソロリと通り抜けた。さらに高さが2m程の回廊を下りたところでようやくゴロタの海岸に辿り着いたのだ。磯には湯ノ崎の名前の由来どおり硫黄成分を主とする臭いが漂っていた。温泉気分で釣りを楽しむのもよいだろう。



防潮堤の胸壁が崩れてドーム状になっているところをくぐり抜けた。撮影した朝方は満潮時で波が防潮堤に打ち付けているが、干潮時はこの前で釣りをすることが出来たのだ

海岸線は最干潮で干上がっていた。左斜め前方に突き出た露頭岩は、現在は乗れる状況にある。ここまで潮が引いているとは思わなかった。乗ってみようか。しかしまもなく潮が混んできてその岩場に取り残されでもしたら大変だ。そこまでのリスクは犯したくない。航空写真で見た溝の真ん中で打つことにする。溝といえども浅いのでかなり前まで潮を漕いで出て行くことが出来る。ヘッドランプの光に照らされた海底は岩盤に海藻が密集して揺らめいている。しかし、立ち込み用三脚は持ってきていないので、立ち込むことはできない。ゴロタ場の海外線から若干後ろに下がって竿を立てた。そして、少しでも遠くへ仕掛を飛ばそうと、潮を漕いで投げ込んだ。3本の竿を出し終えた時には午前1時を回っていた。しかし、すぐにでもアタリが出るだろうと思って見つめていた竿先がなかなか揺れない。何度か打ち返していると、ようやくよいアタリが出た。竿を手に持ちググッと来たところで合わせると魚に乗った。根に潜り込まれないようにと一気に竿を立て、リールを十数回回したところでフッと軽くなった。痛恨のバラシである。どうしたのだろうか。ネットを銜えていただけの魚が離れたのだろうか。それともハリ掛かりしていないカジカが大口を開けた時にすっぽ抜けてしまったのだろうか。その後も同じようなことが2度あった。

2時半、ようやく30cm程のカジカが上がって、その小さな初物をバツカンに入れてニンマリする。続けて35cmほどのアブラコも釣れた。急にアタリが続くようになりカジカ

が6本、アブラコが3本となった時点で潮が満ちてきて、その場には立っていることが出来なくなった。あと1本で規定の10本を揃えることが出来るのだが、帰り道になる磯際の胸壁にまで波が届くようになったので防潮堤の上へと避難することにした。竿を畳むのも面倒で、一段高くなった回廊の上から防潮堤に竿を立て掛けると、防潮堤の最上部に僅かない届かないが、その上に竿先ライトが出た。防潮堤に上がってから、そのライトを目印にして引き上げればよいだろう。来た時に潜り抜けたドーム状のトンネルをスルリと抜け、リュックを担いだままロープを使って崖上りを敢行する。しかし、あともう一息のところまで限界に近くなった。ここで諦めてしまったら、荷物を小分けして何度も往復することになるだろうと最後の踏ん張りをを見せて上りきった。

土方歳三と重ねる

今度は防潮堤の上から打つことになるのだが、その前に竿を振るだけのスペースを作らなければならない。鬱蒼と茂ったイタドリやヨシを踏み倒していると、ようやく熊の寝床のような広場が出来上がった。



イタドリやヨシを踏みつけて釣り場を設置した

私が先ほどまでゴロやコマセを打っていた磯は右方向の遠投になる。遠浅の海だが磯でやっていたときより潮が1m以上混んできているので深さは最低でも1m以上あることになる。ここでも単発ではあるがカジカ3、アブラコ1が上がり、全部で13本になった。

小物が多いが規定の魚を揃えることが出来たのもうよしとしよう。釣り場を後にしたときには駒ヶ岳の遠景に雪雲がかかり、やがて釣り場にも曇りが降り注いできた。

最近の私の釣りはマンネリ感がただよい、釣りを終えたときには気だるさや虚しさが残っていたのだが、久しぶりにワクワク、ドキドキ感を味わうことが出来た。年老いてきた自分には難攻不落と思えた釣り場への行程を、登山用具？までそろえて挑んだことに加えて、他の釣り人が入った形跡も皆無で、大物が竿を伸す期待を十分に膨らませてくれたのだ。

桂川ではボナさんが待っていてくれた。何でも最近立て替えられたという榎本武揚・土方歳三の上陸の碑を取材していたらしい。そのボナさんの話を拝聴しながら、未知の世界への憧れにも似た思いで上陸した土方歳三と今日の自分の釣りとを重ね合わせていた。ボナさんに「こんなハードな釣りは今のうちしか挑戦できない」とお話しすると「君はまだ若い。これからでもまだまだ挑むことは出来る。私は、この年になっても、釣り場に立つとワクワクしてしまうのだよ」と諭された。確かに彼のブログ「ボナさんの北海道釣り三昧」を覗くと飽くなき挑戦に満ち溢れた文章で埋まっていた。



昨年まであった上陸の碑(森町ホームページより)



新しくなった碑（森観光協会ホームページより）

審査結果

審査結果					
優勝	嵐 光博	1 5 7 2 点	(アカハラ434mm+カジカ 380mm+7580g)	落 部	
準優勝	大内誠一	1 3 8 4 点	(カジカ 382mm+アブラコ340mm+6620g)	山 越	
3 位	鹿島釣狂	1 3 7 1 点	(アブラコ376mm+カジカ 350mm+6450g)	湯 ノ 崎	
4 位	吉井 博	1 3 5 0 点	(カジカ 385mm+アブラコ362mm+6030g)	落 部	
5 位	村岸省三	1 3 2 2 点	(カジカ 400mm+アブラコ352mm+5700g)	山 越	

審査は山越駅前にあるバス停でした。その頃には曇が大きなボタン雪へと変わり、ぼたぼたと落ちてきた。釣り場では名人会や海鱗会の大会と重なったが、皆さん臆することなく規定の10本を揃えてきていた。名人会の海津正弘氏、海鱗会の三本木秀子氏、工藤智美氏が私達の審査を見守ってくれた。

優勝者の嵐氏は、唯一落部川河口でアカハラを狙った。ゴロ80本で早い内に卵で腹のでっぷり太った43.4cm以下大型のアカハラ9本にカジカ1本を揃えた。そして左の根原に移動しながら入れ替えの出来るカジカ38cmをとり、ダントツの優勝だった。準優勝の大内氏は勝手知った山越安藤水産前でカジカを揃えてきた。同じところを釣り場にした村岸氏も40cmのカジカで身長優勝を果たした。私は3位だった。4位の吉井氏は、昨年と同様、落部に入り大物カジカ、アブラコを順調に揃えてきた。桂川周辺に入った堀内氏

は数こそそろわなかったが良形のアブラコ、カジカをとり8位入賞を果たした。カジカの
大物を狙った本石倉組4名は根掛かりに苦戦して上位入賞とはならなかった。同じくボナ
さんは、今回は根掛かりで7号のラインが簡単に切れてしまうというアクシデントに悩ま
されて涙をのんだ。



入賞者の面々：雪のためバスの中で表彰式を行った。

絶品の一品

昼食は長万部にある「元祖浜ちゃんぽん」と大きな看板の掛かった三八飯店でとった。
この店の「あんかけ焼そば」はボリュームがあり皆が若いときはよく頼んでいたのだが、
年老いた現在では注文する者はいなかった。食べきれないのだ。私が注文した辛味噌ホル
モンラーメンは絶品だった。

帰りのバスではほどよい疲れでぐっすりと眠ることが出来た。トイレタイムで起こされ
た中山峠は真っ白な銀世界であった。道路上には圧雪された雪が積もり運転手の話ではこ
こまで来るのに路肩に落ちている車が5、6台あったという。

自宅に戻ると車庫が水浸しになっていた。車庫は住宅の地下と併設されているのだが、
その地下の物置にまで水が浸透している有様だ。原因は水を汲み出す水中ポンプが作動し
ていなかったのだ。そのポンプは水が地下水槽に溜まってくると浮子玉が自動的に作動し
てスイッチが入る仕組みになっている。水槽に棒を突っ込んで掻き回して浮子を持ち上げ
たのだが駄目である。仕方なくバケツで水を汲み出す作業をしなければならなかった。半
分くらい水を汲み出してしまったときに、水中ポンプへと繋がるコンセントが外れている
ことに気がついた。そのコンセントを差し込んでみるとポンプが勢いよく回り、みるみる
溜まった水が無くなった。人間（私）の能力では1時間ぐらい掛かってようやく半分くら

いしか汲み上げることが出来なかったのだが、機械だとあつという間だった。

昨年の岩見沢を襲った豪雪に懲りて、カーポートをつくることにした。住宅を新築したときは車庫前が砂利だったため、庭の土留めをつくったときに余ったコンクリートを自分で敷き詰めていたのだが、素人の甘さで、凸凹になっていたのだ。女房に直しましょうと促されても面倒で延び延びになっていたのだが、昨年の豪雪で踏ん切りがついた。少々の雪でも耐えられるようにとアルミではなく鉄骨製のカーポートを台形の駐車スペースのサイズに合わせて特注した。その工事のために業者がコンセントを使い、そのままにしてあったのだ。幸いにも地下に置いてある釣り具等に被害はなかったが、釣りで疲れている上に水汲み作業で体がボロボロになり、釣り道具の後片付けは出来なかった。

次の日、道具を片付けていると優勝した嵐氏から電話が入った。カジカの共和えを作ったので食べないかというものだ。ずうずうしくも頂きに行く。そこで異様なものを見た。物置の中の発泡スチロールの魚箱に大きなカジカが満杯に積まれていたのだ。なんでも北海道釣り名人会の金井氏がカジカの共和えを作ってくれと置いていったものだそうだ。私たちとほぼ同じ釣り場範囲で山越での釣果だという。婿のアブラコも48cmあったという。ほんとうにどの様にして釣ったのだろう。さらに優勝者の越智靖基氏のカジカは49.6cm、重量も11kg超えで2063点だというからすさまじい。名人会恐るべしである。とにもかくにも嵐氏からいただいたカジカの友和えは、丁寧に処理された胃袋のしこしこ感がたまたま、味噌やカラシとともに磨り潰したキモが絶妙の味を醸し出していた。